

魍皇鬼と「ごほうび」

鷺羽は後悔していた。いや、後悔というのとも少し違う。鷺羽は甘すぎた自分を反省していたのだ。

「またこんな所に貼って！魍ちゃん、駄目でしょう」

砂沙美が畳んだ洗濯物に、魍皇鬼はシールを貼ったらしい。砂沙美に叱られると、魍皇鬼は半ベソで鷺羽の居るソファーまでやってきた。鷺羽は魍皇鬼を抱きかかえて撫でてやった。

「みゃう」

「魍皇鬼、何にでもシール貼ってはいけないのよ」

「みゃん、みゃんみゃん」

「そうね、あんたは洗濯物が綺麗に畳まれていたから、ごほうびシールを貼っただけなのよね。でも、昨日は洗いたてのコップにも貼ったでしょう。それから天地殿が収穫してきたニンジンにも。そんなになんでもかんでも貼っては、ごほうびの意味が無くなってしまいうじゃない」

魍皇鬼が至る所に貼っているシールは、先日、鷺羽と魍呼と三人で買い物に行った時に、鷺羽が買い与えた「ごほうびシール」で、「たいへんよくできました」と書かれている。魍皇鬼はとても喜び、魍皇鬼の目から見て「たいへんよくできました」と思うものには全て貼るようになってしまったのだ。鷺羽は、もっと魍皇鬼が理解してから買い与えれば良かったと悔やんでいたのだ。

「確かに、洗濯物も、洗いたてのコップも綺麗になったし、天地殿のニンジンは美味しいから、よくできましたなんだけれど…」

「みゃあん」

「でもね、そんなにベタベタ貼っては、皆が困るでしょう」

「みゃーう」

「貼って良いものになら、貼っても良いけれど…」

鷺羽がどう言い聞かせれば魍皇鬼に伝わるかと迷っていた時、天地が通りかかった。

「また叱られたのか、魍皇鬼」

「みゃん…」

天地は魍皇鬼の頭を撫でてやり、仕方ない奴だなと笑った。

「魍皇鬼にごほうびシールを買った私が悪いのよ」

「でも、シールを貼ってるのは魍皇鬼だもんな」

「みゃあん」

「天地殿、何か良いアイデア無いかしら？シールだと皆、剥がすの大変でしょう。阿重霞殿の大事な硯に貼って、雷落とされたし、美星殿なんて気付かずにシール付けたまま服を着ていたし」

「魍呼もそうでしたよね。顔にシール貼ったまま一日過ごして、阿重霞さんに笑われてましたものね。んー…シール以外にすれば良いんじゃないですか？」

「シール以外？」

「シールは、くっついちゃうから取るのが大変だけど、それ以外だったら…」

天地の提案に驚羽は首を傾げたが、魍皇鬼は嬉しそうに天地にくっついた。

「みゃん、みゃあん」

「こらこら、よせよ。ちよつとまってる、いま考えてるんだから…」

そこに魍呼が顔を出した。魍皇鬼が天地に抱きついてるのを一瞥すると、

「なに抱きついてんだよ、魍皇鬼」

乱暴に魍皇鬼の身体を引っぱった。

「よしなさい、魍呼ちゃん」

「だって、あたしの天地に…」

「魍皇鬼にまで嫉妬しないの」

「なっ」

嫉妬とかじゃねえよと、魍呼がぶつくさ言っていると、天地が妙案を思い付いたらしい、手をポンとひとつ打った。

「魍皇鬼、良いもの作ってやるよ」

うんと頷く天地の顔を魍呼と驚羽は眉を顰めて見つめたが、魍皇鬼は飛び跳ねて喜んだ。

「お前、そんなに器用だったっけ？」

「黙ってる」

「あ、ほら、そこ削りすぎなんじゃねえの？」

「黙ってるって。手元が狂うから」

天地は彫刻刀を使って、消しゴムに字を彫っていた。魍皇鬼の「魍」の字は難しすぎるので、ニンジンのマークを彫ってやった。

「それ、ニンジンか？芋みたいに見えるぞ」

「ああ、もう煩いよ、魍呼」

隣りで茶々を入れる魍呼を睨み、天地の手が止まる。魍皇鬼はキツと魍呼を睨み、抗議をした。

「みゃあ！みゃん！みゃん！」

「何だよ、お前がそんな騒ぐなよ。あたしはお前のために天地に言ってやってるんじゃないか」

物は言い様である。天地は苦笑いをする、作業に戻った。魍皇鬼はあっかんべーをする。魍呼を無視して、天地の膝に身を乗り出し、その手元を真剣に見つめた。

「なんだよ、なんだよ、無視かよ」

「魍呼ちゃん、天地殿の邪魔しないの」

「邪魔なんかしてねえよ」

ぶーと膨れる魍呼を驚羽はやれやれと見つめた。どうやら、魍呼は今まで以上に焼き餅焼きになったらしい。魍皇鬼にまで妬くなんて、先が思いやられると驚羽は溜め息を吐いた。

「よし、できたぞ！」

「みゃあん！」

天地は魍皇鬼に判子消しゴムに朱肉を付けると、広告の裏に押ししてみた。

「みゃあああん」

「よし、これで良いだろう」

思っていたよりも良い出来だと感じたのか、天地は満足そうだった。魍皇鬼は魍呼には見せず、驚羽の元へ駆けて行き見せた。それを見た驚羽は、魍呼が言う通り、ニンジンというより芋だなと思ったが、天地の手前、それは言わない事にした。

「良かったわね、魍皇鬼」

「みゃあん」

「でも、何処でも判子押しちゃだめよ。魍皇鬼の物にだけ押しなさい」

「みゃあん」

魍皇鬼は大きく頷いた。

だが、その約束はあっさりと破られた。

「魍ちゃん！また悪戯しちゃったの？」

驚羽が研究室から出ると、砂沙美が仁王立ちしており、砂沙美の傍らで魍皇鬼がしゃべっていた。さらに、美星が何かを握りしめて、声も無く泣いていた。

「驚羽お姉ちゃん、魍ちゃんがまた…」

砂沙美の話によると、魍皇鬼が判子を押しして遊んでいた紙は、美星が集めていたクーパー券だったというのだ。

「良いんですよ、砂沙美ちゃん：私が此処に出しておいたのがいけないんだから…」

美星は涙声で魍皇鬼を庇ったが、その顔にはどうしてこれに…と書かれていた。

「もう、魍ちゃん。自分の物にだけ押しなさいって言ったのに…」

「みゃううう」

驚羽は困った。これでは、何度叱ってもきくと魍皇鬼は繰り返すだろう。かといって、魍皇鬼から判子もシールも取り上げてしまうのは簡単だが、それでは魍皇鬼の好奇心や自由遊ぶ心を摘んでしまう恐れがある。

「そうだ、魍ちゃん！砂沙美が用紙を作ってあげるよ」

「みゃう？」

「用紙ってなんですか？」

「魍ちゃんが判子を押し用紙。お手伝いしたら、ひとつ判子を押すの。それだったら、魍ちゃんが判子を押ししても良いし、お手伝いして貰えば、砂沙美も助かるもの」

その手があったか！と、鷺羽はハツとした。魍皇鬼可愛さに、考えが固まっていた自分を恥じた。

「良かったじゃない、魍皇鬼。砂沙美ちゃんにお手伝い帳作って貰いましょう」

「みやああん」

「良かったわね、魍ちゃん」

美星も賛同してくれたので、魍皇鬼は喜んだ。

「じゃあ、早速作るね。あ、ニンジンの絵も描こうか」

砂沙美はそう言うと、魍皇鬼のお道具箱からクレヨンを出し、二人で仲良くお手伝い帳を製作した。

お手伝い帳を作ってからというもの、魍皇鬼は毎日進んで手伝いに精を出した。砂沙美の食事の用意から、片付け。天地の畑仕事の手伝いから、鷺羽へ珈琲の配達。美星と洗濯物を畳み、阿重霞と庭の雑草を抜いた。

「本当に魍皇鬼が手伝ってくれるから助かるわ」

手伝い帳に判子を押す魍皇鬼を眺めながら、阿重霞が優しく言った。

「それに引き換え、ぐうたら娘は…。砂沙美、魍呼さんにもお手伝い帳作ってあげたら？」庭で洗濯物を干していた砂沙美は苦笑いをこちらへ向けた。勿論、阿重霞は庭にいる砂沙美に言ったのではなく、居間のソファで寝転んでいる魍呼に向かって言ったのだ。

「だれがぐうたら娘だよ。魍皇鬼は判子のためにしてるだけだろう？」

「あら、それだって、手伝わないよりマシでしょう」

そこに、畑から天地が帰って来た。魍皇鬼は天地を見つけると、お手伝い帳を持って駆け出した。

「魍皇鬼、ただいま。お、また手伝いしたのか。偉いなあ」

天地は目を細めて魍皇鬼の頭を撫でた。魍皇鬼は嬉しくて飛び跳ねている。魍呼はその様子を見ながら、面白くないと思った。実に面白くないと。魍呼は身体を動かすと、庭に背を向けた。

その夜、壁抜けをすると、魍呼は魍皇鬼の枕元に降り立った。魍皇鬼が枕元にお手伝い帳を置いて寝ている事を魍呼は知っていたのだ。

「自分だけ天地に褒められやがって…」

大人気ない魍呼は、しゃがんで魍皇鬼のお手伝い帳をそつと手に取ると、立ち上がろうとした。だが、その時、魍皇鬼がパチツと目を開いた。

「みゃん？」

「…！」

魍皇鬼は現在、砂沙美と一緒に寝ている。砂沙美は当然阿重霞と一緒に部屋で寝ているので、此処で魍皇鬼に騒がれては砂沙美に非難を浴び、阿重霞に叱責されるだろう。果て

は天地に呆れられ、嫌われるかもしれない。魍呼は焦り、咄嗟に魍皇鬼の口を塞いだ。

「ばっ、莫迦、声出すんじゃねえよ。大人しくしてろってば」

小声で魍呼がそう言っても、魍皇鬼はももごとく言い、魍呼の手を自分の手で振り払った。振り払う時に、魍皇鬼の爪が魍呼の手を引っ掻き、魍呼にぴりりと痛みが走った。

「痛てえじゃねえかよ！」

自分の事を棚に上げ魍呼は魍皇鬼を睨んだが、魍皇鬼は起き上ると、魍呼の手を取り、廊下に出た。驚羽のところに魍呼を連れて行く気なのだ。

「何だよ、驚羽に言いつけるのか。お前はいつだって、皆に庇って貰えるもんな」

魍呼が刺々しく言っても、魍皇鬼は喧嘩に乗らなかった。手を繋ぎ、階段まで来たところで、下から上ってくる天地とバツタリ出会った。まずい！天地に告げ口されると、魍呼は身構えたが、魍皇鬼は何も言わなかった。

「あれ？魍呼どうしたんだ？魍皇鬼と一緒になのか…」

天地は固まっている魍呼と、ニコツと笑っている魍皇鬼を見比べると、

「ああ、そうか魍皇鬼がトイレなんだな。付き添ってやるのか偉いぞ、魍呼」

「みやあうん」

何を勘違いしたのか天地は笑顔で言い、魍皇鬼の頭を撫で、魍呼に微笑みかけると、おやすみと言って自室へと行ってしまった。

天地が去ってからも、魍呼は動けずに居た。身体が硬直し動けないのだ。天地に褒められたこと…けれど、つい今しがたまで自分は魍皇鬼を苛めていたこと。魍呼は後ろめたくなり、痛いほどに後悔をした。

「みやん」

魍皇鬼が魍呼の顔を見上げる。ほら、良い子だったでしょうと得意気だ。

「……………分かったよ。悪かったよ、あたしの負けだよ」

「みやあん」

魍皇鬼は笑顔で頷くと、そのまま驚羽のところへ魍呼を連れて行った。だが、驚羽には何も言わず、

「あら、珍しいわね」

と、迎える驚羽に、三人で寝ようと提案した。

「魍呼ちゃんと一緒に寝てくれるなんて嬉しいわ。三人で寝ましょう」

魍呼には耐えがたい苦痛だったが、此処で断ると、魍皇鬼が驚羽に告げ口をするのは目に見えていたので、渋々一緒に寝ることにした。魍皇鬼は、魍呼が三人で寝ようと言ったのだと驚羽に伝えた。

「そうなの。ママの事を忘れないで居てくれてありがとう、魍呼ちゃん」

驚羽の満足そうな顔に、魍皇鬼は嬉しくなり、魍呼は何も言えず、三人は川の字で眠りに就いた。

翌朝。魍皇鬼が起きると、居間の机の上にニンジンが山盛りに置いてあった。

「どうしたの？これ」

「天地様、畑から収穫したんですの？」

「こんなに沢山、収穫なさったんですか、天地さん」

「いや、俺じゃないですよ」

砂沙美、阿重霞、美星、天地は山の様なニンジンを見て目を丸くした。魍皇鬼はひとり、目を輝かせて喜んだ。

「仕方ないから、今日はニンジン料理尽くしだね」

との砂沙美の言葉に魍皇鬼はさらに喜び手を大きく広げて喜んだ。よかったなと天地達は口々に言ったが、誰も魍呼がソファーに倒れている事に気が付かなかった。

驚羽が研究室から、おはようと出て来ると、魍皇鬼はニコニコ顔で報告をし、その際に魍呼がソファーでうつ伏せになっているのを発見した。魍皇鬼は駆けよると、自分の洋服のポケットのから「ごほうびシール」を取り出し、魍呼に貼ろうとした。けれど、寝ていると思った魍呼がその手を掴み、引き寄せた。そして、魍呼は小声で

「良いか、これで借りは返したんだからな…」

くぐもつた声で呟いた。

「みゃん」

「絶対、天地に言うなよ」

「みゃん、みゃん」

「絶対だぞ。あたしがお前のお手伝い帳を盗もうとした事、天地に言うなよ」

容易く頷く魍皇鬼に、魍呼は何度も言い聞かせた。

「なにしてるの、あんた達」

驚羽が声を掛けると、魍呼は起き上がり、

「魍皇鬼がよくやってるって褒めてやったのさ」

と、笑った。魍皇鬼も頷いている。驚羽は昨晩から、魍呼の行動を不審に思っていたが、まあ、子ども達の事には口を出すのは野暮だと思い、自分の疑問を心に仕舞った。

魍呼は、魍皇鬼が手にしていたお手伝い帳に毛糸をつけてやり、それを魍皇鬼の首にかけてやると、ぐしゃぐしゃと雑に魍皇鬼の頭を撫でてやった。

「みゃああん」

魍皇鬼は嬉しそうな顔を見ると、またそれを天地に見せに行ったのだった。